
庖丁梅譜

鍋木恵梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

庖丁梅譜

【Nコード】

N4101C

【作者名】

鍋木恵梨

【あらすじ】

包丁で奉公する半四郎は理由あって刀を持たない武士。側用人の主税はそんな半四郎に武芸修業の浪人との果し合いに挑むよう頼み断られるのだが……

其の一

「奈津のつくるものは、まずいな」

滝口主税の無遠慮なことばに、奈津は頬をふくらます。

「とくに菜ものなんかなつちやいない。塩を入れればいいというものではないぞ。食えるのは梅干しだけだ」

「兄上さまは良人のつくったものを召し上がるつもりだったのでしょうけど、おあいにくさま。家では良人はなにもつくりませんのよ」
奈津がそう云うと、

「京仕込みの包丁道が味わえるかと思つたんだ」

主税の口調はさも落胆したといわんばかりである。

「主税どの、貴方は妻の手料理をけなしにきたんですか」
ずつと無言であつた秋津半四郎は、ようやく口を開いた。

主税は左手にあつた箸を盃に持ち替える。

「例の武芸者の話は、知っているだろう」

半四郎は「はい」と返事をした。

主税は盃を一氣にあおる。

五日前のこと。

八幡社の鳥居の前に板札が掲げられた。札に曰く、

- 一・御領分ニ於テ御役筋認ノ下 仕合仕ル可ク候事
- 一・仕合八一騎一番得手次第 努々遺恨不可有候事

讃岐牢人 梶井新左衛門

武芸修行の廻国牢人と名乗る輩が立てたものである。

この牢人、修行の一環としてこの藩を訪れ領内での果たし合いの許可を申し出た。

断るのも筋ではない。藩は、評定うちそろって許可を与えた。
だが梶井という牢人者、おそろしく強かった。

初日に三人、二日目に藩内の道場より名札が上にある若者が五人、
四日目には師範代が挑んだが、すべて破れ去った。

「だれも勝てなかったのだ」主税はぐいと座りなおした、「師範代
までもが負けた。牢人者にだぞ。このままでは当藩には武辺の者な
しと、もの笑いの種になる」

「それほど強いのですか」

奈津の問いに主税は黙って頷いた。

奈津は鳥肌が立った。師範代でさえ負けただなんて、考えただけ
でも恐ろしい。早く立ち去ってくれないものかと思う。だがこのま
ま立ち去られてはお国の恥となる。受けた恥辱は雪がねばならない
という主税の意見も、奈津には理解できた。

良人の半四郎を見やる。

半四郎は主税の直視にこたえたまま表情は変わらない。

「半四郎、木刀でいい」

主税は静かに盃を置いた。半四郎は視線を落とす。

「それだけは、ひらにご容赦を」

「おれが頼んでもか」

「お役に立てなくて残念ですが」

そうか、とだけ云って主税は再び盃を手に取った。

半四郎は膝に拳を乗せたまま、押し黙っている。

奈津は両者を交互に眺め見た。

行燈の明かりが急に薄暗くなったと思えるほどに、ふたりの横顔
は闇にとけている。澱んだ空気の中、奈津は背筋を伸ばす。

「兄上さま、用件はそれだけでしょうか」

「……ああ」

「今度いらつしやるときは夕餉を取ってからになさいませ」

主税は唇の端で笑った。

「そうだな。そうするよ」

主税は刀を手にして座を立つた。奈津が手を出すのを制し、彼は左の片手だけで二本を腰に差す。

半四郎はその器用なさまを、暗い目で見つめていた。

主税を見送っている間に下ばたらきのおえいが片づけを済ませていた。

客間は静まり返っていた。ただ、炭は音もなく燃え続けている。ほの暗くしんとした中、半四郎と奈津は向かい合う。

「おれは臆病者だな」

半四郎はひとりごちた。

「ちがいますわ」奈津はつよく云った、「兄が無理なことをおっしゃっているだけです」

「主税どのには返すことのできない恩があるというのに」

半四郎はまぶたを伏せた。

「恩など何です。あなたに牢人とあい対せと申すなら、兄が相手すればよろしいのです」

「奈津！」

半四郎の喝に奈津は肩をすくめた。

「ごめんなさいまし……消えるような声で奈津は呟いた。

「すまなかった」

半四郎は妻の肩を抱えた。

細かい震えが半四郎の身へと伝う。

「とにかく、おれは庖丁しか持てないのだから」

奈津は、応えるように頬を寄せた。

其の二

領主伊予守の御前には、主税と国家老篠原長門がひかえている。篠原老はこんどの国入りで江戸からやってきた、伊予守のお気に入り。気が入らなかつた。理由は益体もない。江戸表で側用人として取り入った人間と思っているからだ。

伊予守は、家督をして初の御国入りであつた。

江戸上屋敷で生まれ育ち、江戸を出たことがない。しぜん国許の事情に疎く、「武者」の相手にはだれを選べばいいのかわからない。篠原老の申すとおり、道場の者に命じるしかなかった。

その結果たるや惨憺たるものだ。

江戸ならもつと人がいただろうか。愚にもつかぬことを、と伊予守は嗤う。

翻つて、滝口主税は。主税は国家老とぶつかるつもりはなかつたから、はじめに半四郎を推挙して鼻であしらわれたあとは、お手並み拝見を決め込んでいた。

しかしそうは高を括れぬ事態となつた。

「実は殿。本日、秋津に探りを入れました」

「滝口どの、まだそのようなことを云うておるのか」

篠原老が顔をしかめるのを制し、伊予守が問う。

「秋津とは、主税の義弟であつたな」

「私は秋津と同じ年で、同じ年のころ、江戸の道場にあがりました」主税は学問も優秀だったし、武芸でも頭角をあらわしていた。

滝口家は家老格で親は大目付役。主税は幼いころから江戸上屋敷の若さま……いまの藩主、伊予守の側に仕えていた。

自負と責任が主税にはあつた。だからこそ、人より抜きんでるために努力を重ねてきた。その主税が同い年で唯一、敗北したあいてが秋津半四郎であつた。敗北ゆえに、主税は半四郎と竹馬の友となつた。

「秋津は先輩を飛び越し、名札が筆頭にあがったことがありました。私が筆頭となったのはすぐに秋津が道場を去ったためです」

秋津家が表台所賄方の包丁役人でなければ。

半四郎が御徒組育ちでなければ。

——庖丁ざむらい。

——腰に差しているのは庖丁か。

——大根斬りの筆頭。

そんなやつかみ、そねみを受けることもなかっただろう。

「思い出したぞ」伊予守は遠い目となった、「そのほうの右腕だな」半四郎は今ほどに堪え性ではなかった。陰険に云いつのられ、売り言葉に買い言葉。互いに刀を抜いてしまったのである。主税は止めに入った。結果、半四郎は主税に手傷を負わせる。主税の右腕は、生涯動かない肉塊となった。

私闘、まして若君に仕える家老の子を斬った。

半四郎の父は腹を切り苦悶の末に果てた。家はいったん取潰された。

辛うじて、半四郎の命だけは助かったが、三年の放逐ののち、半四郎は本国詰として秋津の家を再び興した。

喧嘩両成敗にしては、半四郎を煽った方に大したおとがめがなかった。それを工案し滝沢家老が埋め合わせたのである。

だが、

秋津半四郎は帯刀せず——

先代の藩主に、誓紙を差し出したうえの帰藩であった。

妹の奈津は嫁いで以来、帯刀するのを見たことがない。出仕も、身を守るという意味での脇差しか差さない。

帯刀せぬ、ということは未だ罪人扱いと云うことだ。屈辱であった。

周囲からも軽んじられ口惜しい。奈津は嫁いだ当初、江戸在府の

主税にそう書き送ってきたものである。

「秋津はどうであった。断ったか」

「役に立てず残念であると」

「やはりな」

「よいではありませんか、殿。包丁人ごときに任せるわけにはゆきませぬ」

主税はおもわず眉を寄せた。

半四郎は臆病で主税の頼みを断ったわけではない。ましてや、意固地ゆえではない。

篠原老に噛みつくところを、ようやく呑み込んだ。

伊予守は沈着な主税の常にならないようすを見、

「主税は義兄であり友であるから秋津を買っているのだろうが、五年来、脇差のみでは昔の腕も望めまい」

と云うと、篠原長門に剣術指南役の栗栖典膳をよべ、と命じた。

篠原は御前をさがった。

あとに残った主税の目の前で、伊予守は嘆息する。

主税は御主君が哀れでならず、胸がつかえる思いがする。初のお国入りで、斯様なつまらぬ問題に右往左往させられるとは。

あとはないのだ。藩の面目を守るためには。

主税は、覚悟を決めた。

其の三

「満開だな」

半四郎は裏木戸の梅を見上げていた。良人を出迎えた奈津は、半四郎の視線を追った。

「匂ふがごとく今さかりなり、ですわね」

「豆腐を買ってきた」

半四郎は小脇に桶を抱えていた。

嫁してきたはじめは不快だった。武士が食物を買って帰るなどと、職人でもやらないことではないか。実際、意見した。

だが、半四郎はわかった、と云うなり変えようとしない。

修行していたころを思い出して楽しくてね。そう笑うだけなのだ。奈津もやがて考え直した。半四郎は家を潰され江戸を出た。そして京に庖丁を学んだ。それは家命で修行に出たのとは違い、門戸を叩くまでに並々ならぬ苦労があるらしいと、主税から聞いた。その修行時代を思い出すというのだ。無碍にやめてほしい、などどうして意見をいえるだろう。

「おえいに渡しておきます」

「いや、おれがつくろうと思ってな」

奈津は目をみはった。

「あなたが」

「おれがね」

半四郎は穏やかに微笑んだ。

厨では下女のおえいが夕餉の支度を終えたばかりであつた。

「あれえ、だんなさま」

「それをおくれ」

半四郎はまな板と布巾を受け取ると、豆腐の上にのせた。水抜きである。水抜きの間に、梅干しを裏ごしし、芥子けしの実をつぶす。水抜きを終えた豆腐に串を刺す。刺して、炭火にあぶる。梅と芥子を

まぶし、さらに軽くあぶる。

奈津もおえいも半四郎の手ばやさに見とれ、ぼうつと立っていた。
「運んでくれ」

といわれ、ようやくふたりは我にかえった。

「えいと勘右衛門の分もそこにある。食べてみてくれ」

おえいは感激して何度も会釈し、主人らの膳を放り出して裏庭の勘右衛門を呼びに駆けだした。

あつけにとられながらも奈津は怒って、

「あとで叱っておきます」

「自分で持つていくさ。おまえも一緒に食べよう」

半四郎は苦笑し、ふたり分の膳を持つて厨を出た。

奈津はあわてて半四郎のあとをついていった。

膳は一汁一菜、そこに半四郎の豆腐椀がひかえる。

深い土の色、白い肌に茜さすような浅葱あさぎいろの梅。雲のごとく芥子が散り、ささやかに開きはじめた梅の花弁が華を添える。

奈津はおそろおそろ、箸をつけた。

ほのかな梅の香りと酸っぱさが、次いで甘みが口のなかに広がる。芥子の実の歯ざわりがまた、顎をうごかすことに面白い。

——これが良人のしごとなのだ。

そう思うと、奈津は梅豆腐もいとおしく、誇らしい。

「どうだ」

半四郎は興味深そうに問うた。

奈津は少し首をひねって考える。

「なんと申し上げればよいのでしょうか。とにかく、おいしゅうございます」

「梅干しの味がいいんだ」半四郎は嬉しさをかくさず云った、「これは奈津の味だよ」

奈津は紅をはいたように頬を染めた。

だが、なぜ今日。

奈津は汁椀を近づけつつ考えた。

考えられることはただひとつ。あの兄のことばだ。

——おれが頼んでもか。

「あなた、刀をお持ちになるのですね」

半四郎はその問いには答えず云った。

「指南役の来栖どのと主税どのが向かわれた。ことと次第によって
は」

「……兄が」

「主税どのは真剣のみを携えていたという……主税どのがやるくらいなら、おれが」

半四郎は静かに箸をおいた。

「おまえは主税どののお屋敷へ行きなさい」

「離縁などいたしません」奈津はきっぱりと告げた、「誓紙をたが
い譴責けんせきを受けたとしても、どこへも参りません。わたくしは秋津半
四郎の妻です」

半四郎は眼を細めた。

妻の瞳は覚悟の色か、活き活きとした光を帯びている。声音も力
づよく、何者にも引かぬ決意を示していた。

「お勝ちになりましたら退身いたせばよいのです。あなたなら、ど
こへなりとも仕官できます。仕官叶わずとも小料理屋でもひらけば
やっていけますとも。わたくし、ついて参りますわ」

「小料理屋か」

「お待ち下さいませ、刀を取りに参ります」

「刀はいい」

ではと、奈津はま新しい袴はかまをさし出した。半四郎は立ち上がって
足を通すと脇差のみを腰に差した。

「お氣をつけていつてらっしゃいまし」

奈津が深々と頭を下げると、半四郎は安心したようにおっとり
と微笑した。

其の四

朱が遠い空に溶け、闇に変わろうとしていた。

八幡社の梅はほかよりひとあし早く、そのいのちを誇る。

白梅香る樹下、武者ふたり、相対す。

剣術指南役・栗栖典膳は、木刀を正眼に構え、立っていた。息は乱れていた。肩がしきりに上下する。

向かえうつ牢人・梶原新左衛門は眉濃く、肩幅広い偉丈夫。静かに、上段から振り落るす時を待っていた。

両者、ともに動いた。

典膳は膝をはらった。梶原は動きを読み、細やかにかわした。なお典膳は打撃を加えた。打込みを流されながらも、二歩三歩と踏み込む。典膳は押すに押した。

かつ。

と、軽い交錯音。

即、典膳は下がった。

形勢逆転、梶原の切り込みは速度を速めていった。

打ち込みは鋭く、速い。典膳は肩の前で受け流す一方である。

主税は太刀筋を追いかけた。

——見える。

動きがはつきりと、見える。もしおれの腕が自由なら、栗栖どのよりまえにおれが申し出た。このような介添役でなく……。

主税は唇を噛んだ。

やがて典膳は追いかける側となった。しかし典膳は息を乱していた。喘ぐように追う。

梶原は闊達に動く。歩に乱れはない。

突然、典膳の瞳に月が映る。牢人は何処……。

一瞬だった。

音もなく、一刀が空を舞った。

「勝負あつた」

主税の声と同時に、典膳は膝をついた。

「負けにござる」

最悪の事態だった。

「梶原氏」主税はつとめて冷たく告げた、「当藩にはもう、格別の者はおし申さず」

牢人梶原は木刀を脇におさめ黙っている。

主税は言葉を継いだ。

「されど……面目にかけてこのままにはできません」

「拙者を討つ、と」

梶原は問うた。低く、透き通った声である。

「ええ。されど未練な真似はいたしません」主税は右腰より片手で刀を抜いた、「真剣にて、いざ」

主税の右腕はただの飾りと、梶原はそこではじめて気づいた。

でありながら、挑む。

——決死の覚悟だ。

諸国廻遊の剣士はすぐに悟った。

右腕の使いぬ男の剣術のほどは測れない。だが、捨身ほど厄介なものはない。

「拙者は武芸修行です。木刀にてお相手いたします」

「それは道理ではありません。拙者が真剣なのだから、貴殿も真剣を執るのが筋というもの」

「相手の得物は問わずとあります。拙者は木刀にてお相手いたしますし、でなければ御免被ります」

「では木刀と真剣にて」

主税は苛立った。こちらが真剣でも木刀という。それでも勝利する積もりなのだ。梶原の自信のほどを感じ取り、主税を苛立たせる。だが、こちらは一度譲った。それでも向こうは木刀に拘った。なれば負い目はない。木刀と真剣の勝負であれ、後ろ指差されるいわれはない。

——遠慮なく斬る。

主税は自らに云い聞かせるように、ひとり頷いた。
その矢先である。

「待たれ、主税どの」

主税、梶原、典膳とも、声の主をさがした。

主税は聞き知る声に複雑な思いでかすれた声をもらした。

「半四郎」

梅の木の木陰、提灯をかがげ三者を煌々と照らす。
その薪の下に浮かび上がる姿は、半四郎であった。

「拙者、台所組秋津半四郎と申します」

「庖丁ざむらいがなんの用だ」栗栖典膳は怒った、「真剣勝負を邪魔するかッ」

「滝口主税どのは私の義兄です」

半四郎は笑みを絶やさず云った。

「敗北のときは腹をかつさばくお積もりでしょう。しかし、よくお考えください。義兄上は殿の片腕と申すべき人物。あたら命を粗末にするのは不忠ですよ」

「されど」

主税が渋るのを遮り、半四郎は梶原牢人に向き直る。

「お手合わせ願えますか」

梶原は不思議な顔をした。

「貴殿、腰のものは」

「帯刀を許されていません。かわりにこれを帯びております」

懐紙の上にさらし布に巻いた二本をのせる。脇差、そして包丁。

半四郎は一礼し、主税に託した。

「よろしい。参りましょう」

梶原は右手の木剣を執り直した。

「いざ」

と受けた半四郎の孤影に、三人はあつと声をあげた。

其の五

半四郎は澄んだ眸子で梶原を見ている。

その軽い拳の先には、長いすりこ木があつた。

……下らぬ冗談だ。

と感じたのは、両者相構えるまでだつた。

梶原は剣に力満ち、気力ともに高みにある。

対する半四郎は泰然自若と構え、ただ静かに気を吐く。

主税は全身の血が凍りついた。

梶原の力感に圧倒される。栗栖、そして自らの手合いには全く感じなかつたことに、軽からぬ失望を覚える。それに勝負を挑んだ自分のなんという無謀さよ。

昔はまだ実力僅差と思われた半四郎は、その牢人と呼吸を争うまでの達者となっている。

月がふたたび梅の木の狭間から姿を見せる。

——決着は一瞬だ。

その一瞬を見逃すまじと、栗栖も主税も固唾をのんで時を待った。その時である、一陣の風が駆け抜けた。

梅の枝がざあつと音を為して揺れ、枝先の提灯が地に落ちて燃え上がる。梅吹雪が激しく舞い乱れた。

刹那。

梶原が疾呼しながら踏み込んだ。怒髪を突くかの如き声とともに、闇を引き裂いて一閃走る。

迎え突っ込んだ半四郎、

「やあッ！」

と叫んだ声と同時に、すりこ木は梶原の右肩骨に突きを入れていた。梶原はあつと叫びながら体勢を立て直すが、半四郎が刀持つ手を打ちしだく。

からり、と梶原の木刀は乾いた音を立てた。

「……参りました」

梶原はかすれた声を漏らした。右肩を押さえ激痛に耐えかねる面持ちで、片膝をつく。

半四郎はふう、と息をついて肩の力を抜いた。主税を振り返り、常と変わらぬ穏やかな顔で云った。

「滝口どのに栗栖どの。貴公らの手柄にさせていただきたい」

「半四郎」

「刀を使わずとはいえかような振舞い、私には難がありますので」
「分かった。半四郎の云うとおりでしょう」

主税が答えると、半四郎はにこりと笑いながら一礼し、

「頼みましたよ」

と脇差を受け取ると、すりこ木とともに腰に差し足早に立ち去っていった。

主税は友の背中を見送り、唇を結ぶ。

「……」

姿が見えぬようになるのを認めると、険しい目を向ける梶原を見下しながら、

「卑怯者と呼ぶるも」

主税はその刀を閃かせた。

「滝口どの！」

栗栖典膳が叫ぶ。

と同時に、梶原は左で木刀を執った。木刀は面上を襲う主税の白刃を斜めに截り、梶原は僅かに体を傾けこれを流した。しかし主税加減を誤り体勢を崩し後へとめる。

主税は大剣の峰を返した。

「覚悟！」

片腕ながら渾身の二の太刀！

……ぱりつとものの裂ける音と、あつと云う声が重なった。

「見事な斬りっぷりだぞ」

茶化すような笑いが起こった。

主税の足元には見事に等分された大根が転がっている。

「半四郎、邪魔をするな！」

主税は憤然と叫んだ。

「邪魔するなと」

「そうだ！」

「藩のために、か」

「そうだ」

ふたたび半四郎が姿を見せる。

「なにも斬らずとも」

そう云って、半四郎は残り火くすぶる提灯に紙の束を差し入れた。すぐに焰があがり、形を変え元の姿を失ってゆく。

その光景を見て、梶原が小さく声を上げるのを半四郎は聞き逃さなかった。

「藩のためと血相を変えておのれの命まで掛けたのか」

「そうだ」

「こんな紙切れのために」

半四郎は言葉を切った。物思いに沈むように炎を眺めている。

「半四郎」主税は眉を寄せた、「確かに紙一片のためだ。だがそれだけが真実じゃない。それが燃えたから解決ではないのだ。生かしておくわけにはいかない」

「いまここでこの人を斬ることこそ恥辱では」

「……」

押し黙る主税を横目に、半四郎は梶原の腕を取った。

「骨が折れていますね」

「情けは無用にございます」梶原は苦痛を表すまいと腹から声を出す、「これで隻腕同士、互角の仕合です。それにいくさでは骨が折れたからとて刀を納めてくれと云う訳にはゆきません」

「ここはいくさ場ではありませんよ。それに、いくさ場なら最善を尽くせぬとあれば、一時は引いて立て直すのも悪くはないと思いますけどね」

半四郎は息を継いでから、柔らかく尋ねた。
「傷が癒えるまで当家で養生されてはいかがですか」

其の六

格子越しに空が白む、早春の明け方。

北の山より吹き下りてくる霧は、散り染める梅を取り巻き、どこへともなく去っていった。枝枝の尖は霧の残していった微粒子が美しく珠を綴る。

半四郎は朝番に出仕し、冷たい水に食材を洗う指先を凍らせていた。

今日は式日で、一菜加わる。この一品が半四郎の腕の見せ所だった。

魚河岸の賄方御用より入った旬の飯鰯を、酢を差してやわらかく煮付ける。伊予守が召し上がるときはすでに冷たい。それも考慮して冷めても美味なよう、調味にくふうを重ねる。藩主は若く壮健の身で、江戸定府であらせられた。少し濃いめがお好みかも知れぬ。

半四郎は御昵近以下足輕以上の士分で、御目見はかなわぬ身分であつた。だから實際、伊予守を見たことはない。一度おすがたを拝見できればお好みが類推出来るのに、と半四郎は時に残念に思う。

配膳を済ませれば半四郎らにはしばらく御用はない。

明け五つ（午前八時前）。城が賑わいを見せる時間だ。

側用人は朝番の内でもだれよりも早く登城する。中でも主税は最も早い。

「そういえば昨日一日、なにも云つてこなかったな。」

傷が癒えるまで家で匿っている梶原新左衛門のことだ。

匿うとはいえず、城下の人々は秋津家に滞在していることは既に知れわたっていた。しかし理由は伏せられていた。主税が抑えているのだらう。

当藩師範役、それとも牢人。両者の勝負が決着したのであるう、
とだけは囁かれていた。常より剣とは無縁の賄方でも興味深々の者
が多く、

「秋津、その武者修行牢人とはじっさい、どういう」

「賄方の連中は全員、半四郎を注視した。」

「どうって云っても」

「負けたのか」

「負けたって」

「決まっているだろう。あの牢人だ」

「ああ。それで怪我をしたから養生してもらっている」

「おお、と全員からどよめきが漏れた。」

「なぜ貴殿の家に」

「それは居合わせたから、なりゆきで」

「貴殿は側用人の滝口と昵懇だったな」

「そこが解せぬのだ。滝口殿が預かるのが筋ではないのか。向こうは七百石取りだろう」

半四郎は思わず失笑した。

正直いつて七十石二人扶持の身では、確かに楽な家計ではない。

「それもまあ、なりゆきで」

返答に窮しながら言葉を濁すと、食膳が返ってきた。半四郎はこれ幸いと片づけにかかる。

旨い、とのお声がかりはないが、飯鮓の煮付けの椀はどれも空になっている。

……よし。

半四郎は確かな成果に胸を躍らせながら、朝番を終えた。

昼には空は晴れ上がっていて、白灰色の帷の行方は跡形もない。

鶯が伸びやかな声で早春を謳う。

秋津家の庭は狭い。そこで男ふたりが棒きれを振り回す。一撃を大きく避けると、垣根に突っ込んでいく。それでも当然、本人たちは真剣そのものだった。

一見、滑稽である。

されど、奈津は眸子を見開いたまま総身を震わせるばかりだった。

梶井はあらためて見ると年は二十五六、色浅黒く、弓なりの眉に意志の強そうなはつきりした目、引き締まった口許がひどく印象的な美丈夫であつた。

奈津が数日前感じていた恐ろしさは、朝の霧のように何処へと去つていた。噂と先入観ほどあてにならないものはない。

良人も武芸修行の牢人も、ほぼ腕は互角。これも人は知らない。「奥様」

勘右衛門が敷居の手前で呼ぶ、

「滝口様がお見えでございます」

奈津は手拭いをふたりに渡しながら、

「私が参ります。それと、えいに梅干しを用意するように云つて頂戴」

庭先で半四郎は吹き出した。

良人の武士らしからぬ振る舞いに、奈津も負けじと娘のように睨みかえすと、ぷいと表へ出ていった。

「あれで主税の妹ですよ」

「……本当ですか」

と、梶原は整つた顔立ちを奇妙に曲げる。

「私は貴公はきっと名のある人物に相違ないと思つています。主税もそう思つて、貴公をお上に推挙したいと勧めたと」

「深甚の感謝はしたいと思います」

梶原の言葉は切り口上だが、しんじつはこもつていた。

「いず方とも主取りはしないと申されたとか」

梶原は押し黙つた。

半四郎は衿を直しながら、物語でもするように云つた。

「奈津の料理は全く自己流で、目分量で塩を入れるわ味がなくなるまで茹でるわと、庖丁人としては見てはいられないんです。食べたらもう、さらに驚愕の出来でして……」

半四郎はひとり笑い、続ける。

「ところが梅干だけは旨い。俺がつくるより旨いんです。やはり塩

は、がっさりとそれは大胆に入れるのですが、不思議なくらい味が馴染んでいる。細かいことを言い立て過ぎると、かえって味をつぶしてしまうのですね。貴公はどう思いましたか」

「頂きましたよ。確かに旨かった」

半四郎はにこりと笑った。

「さて……主税が待ちかねていますよ」

主税は袴を着け上座に座っていた。

お茶受けには小皿に梅干がひとつ、添えられていた。待つ間に少しばかり手をつけたのだらう。少し茶は減っていたし、梅の実は皿の端に残っていた。

「お役目でしたら、とりも直さず参りましたものを」

膝を払いながら半四郎は云った。

分かつていて待たせただらう、と主税は云いかけたが、止めた。かわりに梶井氏の同席を求める。奈津の呼びかけに梶井が坐すと、主税は改めて背筋を正した。

「梶原氏、傷が治り次第即刻退国願いたい。これは御上意です」

「承りました。もとより敗北した時点でつぎの藩へ行く所存でした。今すぐにも退国します」

梶原は旅のうを脇に寄せて、深く頭を下げた。

対する主税は頭は下げなかったが、沈痛な面持ちでじつと梶原を見つめていた。

其の七

国境の峠の花暦は城下より少し遅いのだろう。まだ梅は白色の色を芽吹かせていた。

笠をかむり旅のうを背負った武者修行の牢人は、坂の頂点に背を向けていた。坂を越えると隣国である。微かな芳香のなか、秋津夫婦と主税はその牢人と暫く黙って向き合っていた。

やがて牢人が穏やかな様子で、

「世話になりました」

と云った。奈津も労るように答えた。

「ご健固でありますように」

どこからか鶯がひと声啼いた。

「滝口氏」梶原は静かに笠を上げて云った、「あの書き付けが燃えてしまった以上、私は細かい数字までは把握していません。恐らく貴藩の城割や堀の深さ、公儀御届と相違はなかったと思いますかね」

主税は訝しげに牢人を見た。

「……梶原氏、貴公……」

「またお会いすることがあれば、秋津奈津どのの梅干、またいただきたいものですね」

奈津は少し得意そうに笑った。

「では」

梶原は背を向け、坂を上り峠を越えた。

しばらく三人は人影の見えなくなった峠に立っていた。

もう鶯は飛び去ったのだろうか……もう一声はないのだろうか。

三人は待った。

もう声はないのだ。

梅の香りに我に返った主税は、世間話でもするように告げた。

「半四郎。近習番にとの御内意があった。受けるか」

半四郎は惚けていた。

「近習番、ですか」

「殿のお身の回りに詰め御身をお守りする。石高も二百、倍增以上。殿の思召す新しき藩政の血肉となつて、御家を支えていくお役目だ」

半四郎は困惑したように首をひねり、次に奈津を見た。奈津はとけるような笑みを浮かべながらも、力を籠めて頷いた。

——貴方のお好きになさいませ。

半四郎の目がわかつたものを云う。

奈津は温かな視線を返しながら、少しだけ良人に寄り添った。

「城に戻りましたら殿にお伺いください」半四郎は目を上げた、「本日の飯蛸はいかがでしたかと」

主税はふふと声をあげ、寂しげに笑った。

「殿に申し上げておこう」

その後のこと。

梶井の退国後はようとして知れぬ。とりあえず公儀からは何の動きもない。梶井はまた何処かで武者修行を重ねながら、またあの仕事をしているのだろうか。

栗栖典膳は御加増の沙汰があつたが辞退、職を辞し今は隠居の身。隠居ながらも剣豪翁として尊秀を受けている。

滝口主税は側用人筆頭として、日々多忙のようす。伊予守の寵を受け将来を囑望されるも、旧勢力からは当然疎んじられ、敵は多い。時折半四郎に愚痴をこぼしにくる。

そして、半四郎はというと。

ほとんど変わりはない。賄方組頭となり、手当が多少増えたくらいである。それも付合ひが増えて実質減っている。若年寄の娘のくせに、奈津はやりくりの難しい家計に頭を抱える日々だった。頭を抱えるといえば。

「塩、入れすぎじゃないのか」

「何をおっしゃいます。私の味には実績がありますでしょう」

奈津はさらに大胆に塩をつかんで、青梅を敷き詰めた壺に押し込めた。

「まあ見ていて下さい。今年も天下無双の庖丁人の舌をうならす梅干を漬けてご覧にいきますわ」

「……梅のへたを取ったのは俺だぞ」

長雨降らす群雲が峠の向こうに去った、梅夏の午後のこと。
季節はもう夏である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101c/>

庖丁梅譜

2010年10月8日14時09分発行